

聴き手に合わせた情報検索と情報提示を促す教育支援方法の検討

小野田 亮介 (山梨大学大学院 教育学研究科 准教授)

■ 問題意識と本研究の目的

現代社会では、インターネットの普及を背景に、市民が情報発信者となる機会が加速度的に増加している。そのため、学校教育を通して情報発信能力の基礎を形成することは、今後より一層重要な課題になると考えられる。そこで本研究では、「誰に向けて情報を発信するか」に関する認知である「聴き手意識」に着目し、中学生のビブリオバトル(好きな本の魅力をプレゼンする書評活動(谷口, 2013))を対象に、聴き手意識が情報発信活動に与える影響について検討する。そして、そこで得られた知見を基に、情報発信能力を高めるための授業計画(1単元)を提案することを主たる目的とする。

なお、本研究では情報発信活動を(1)「どの情報を提示するか」に関する情報検索と、(2)「どのように情報を提示するか」に関する情報提示の2つに分節化して捉えることで、聴き手意識の影響を精緻化して捉えることを試みる。また、聴き手意識と読み手意識の関連を探ることで、「誰に伝えるか」という認知の特徴についても検討する(図1)。

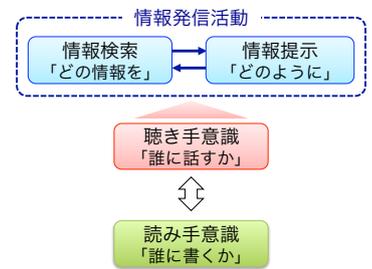


図1 本研究の焦点

■ 予備実験：拡散的な情報検索と収束的な情報検索の違いとは

〈目的・方法〉ビブリオバトルで用いる情報検索ツールを決めるため、中学校1年生と2年生77名を対象とし、連想しながら拡散的にキーワードを書いていく「マインドマップ」(ブザン・ブザン, 2005)と、あらかじめ決められたカテゴリに基づいてキーワードを書いていく「アイテムシート」の間で、本の魅力に関する情報検索と情報提示の特徴を比較した。

〈結果と考察〉「アイテムシート」に比べ、「マインドマップ」の方が多様な情報検索を促し、さらにはキーワード間の比較検討を通して提示する情報を決定するといった、質の高い情報提示に貢献している可能性が示された。そこで、研究1、研究2のビブリオバトルでは、情報検索ツールとしてマインドマップを用いることとした。

■ 研究1：聴き手意識の影響とその範囲を探る

〈目的・方法〉聴き手意識が情報発信に与える影響を検討するため、中学校1年生の2学級80名を(a)学級ごとに本の内容を知らない聴き手にプレゼンする「未知条件」と、(b)本の内容を知っている聴き手にプレゼンする「既知条件」とに割り当て、プレゼンと相互フィードバックを行った。また、フィードバックを得ることで聴き手意識を活性化し、自身の情報発信の内容を積極的に修正しようとする学習者の特徴を捉えるため、認知欲求(神山・藤原, 1991)、および批判的思考態度(平山・楠見, 2004)の2つの個人差要因に着目した。

〈結果と考察〉聴き手意識は、情報検索と情報提示の両方に影響を与えており、マインドマップによる拡散的な情報検索を求めたとしても、聴き手を具体的に想定するだけで検索する情報が聴き手に合わせて偏ることが示された。また、フィードバックを受けても、学習者はそれを自分の情報発信に反映するとは限らず、批判的思考態度のうち客観性や証拠を重視する参加者ほど、聴き手からのフィードバックを自分の情報発信の修正に反映する傾向にあることが示された。

■ 研究2：自分のプレゼンを観ることの効果／話し言葉における聴き手意識と、書き言葉における読み手意識の関連

〈目的・方法〉聴き手意識を明確化する支援として、「自分のプレゼン動画(=聴き手が自分のプレゼンをどのように観ているかを知るための情報)」をみせることの効果を検証するため、中学校1年生と2年生499名を(a)ペアで相互フィードバックを行う「ペア条件」、(b)動画を観る「動画条件」、(c)動画を観ながらフィードバックを受ける「ペア・動画条件」の3条件で、フィードバックの内容とその反映傾向を比較した。また、もう一つの検討課題として、こうした聴き手意識への支援が読み手意識にも影響を与えるかどうかを検討するため、実験授業の事前事後で「自分の中学校の良さを小学校6年生にプレゼンする」という作文課題を与え、事前事後間での比較を行った。

〈結果・考察〉ペア・動画条件の参加者は他の条件の参加者よりも、プレゼンの内容や構成に関してフィードバック情報を反映しており、聴き手に合わせた情報発信を行うことが示された。そこで、ペア・動画条件の授業内容を基盤として1単元の授業計画を構築し、提案した。さらに、聴き手意識に対する支援の影響は作文課題にも現れており、ペア・動画条件の参加者は、他の条件の参加者に比べ、視点取得を行うなど読み手を意識した文章産出を行うようになることが示された。この結果は、聴き手意識と読み手意識の関連性を示唆している。今後、聴き手意識と読み手意識の関連についてさらなる検討を深め、書き言葉と話し言葉の融合を基盤とした、新たな教育支援方法の展開に結びつけていきたい。